

第2号様式（第11条関係）

意見公募手続(パブリックコメント)に対する意見等の概要及び検討結果

- 1 案 件 名：かのや農業・農村戦略ビジョン（案）
- 2 意見の募集期間：令和4年12月8日～令和5年1月6日（30日間）
- 3 意見提出者：4人
- 4 意 見 数：11件

〈検討結果区分〉

A：策定案に反映できるもの	5件
B：既に盛り込み済みのもの	件
C：今後の参考となるもの	2件
D：反映できないもの	件
E：その他感想や質問など	4件
計	11件

番号	意見等の概要	検討結果の区分	意見等に対する検討結果
1	大区画化について ただ単に農地をまとめるだけではなく、十分な排水対策をしなければ生産性の高い農地にはなりません。	A	「第4章 基本施策 2 生産基盤の強化 (3) 生産力の高い基盤の整備」において、用排水施設・農道等の整備に取り組むことを記載しました。
2	荒廃農地について 私が耕作している畑の7割は隣接地に荒廃農地があり、一度荒れた農地を元に戻すためには、多大な資本、労働力、時間の投入が必要。現状の経済環境では、荒廃農地は年々増加していきます。	A	「第4章 基本施策 2 生産基盤の強化 (2) 荒廃農地・遊休農地の解消」において、最適土地利用対策等を活用した再生可能な荒廃農地等の再利用（牧草化等）の推進などに取り組むことを記載しました。
3	品目別振興について サラダごぼうが推奨されているが、選果委託業者は手一杯であり、増反は断られます。	A	「第6章 品目別振興 (4) サラダごぼう（若掘り）」において、新規就農者等の生産者の確保及び生産面積の拡大に向けた農地の集積、集出荷貯蔵施設の整備等による周年出荷体制の強化に取り組むことを記載しました。

4	<p>オーガニック（無農薬、無化学肥料）のお米や野菜の生産を推奨してほしいです。</p> <p>鹿屋産のオーガニックのお米や野菜を、市立小・中学校の給食の材料用に、市で買い上げるなど、農家が率先してオーガニック栽培をするような仕組みを作ってほしいです。</p> <p>鹿屋市にオーガニック野菜専門の道の駅を作ってほしいです。</p>	C	<p>「第4章 基本施策 3 農村環境の保全 (1) 環境保全型農業の推進」に係る具体的な施策の御提案として承り、今後計画を推進する上での参考とさせていただきます。</p>
5	<p>まず、料理人育成から始めて、コンテストを2～3年に1回の割合で開き、アンケートをとってみる。ピーマンをジュースかケーキにできないか試作品を作り、福岡か東京で試食会を行う。これもアンケートをとる。今後、料理だけでなく、サプリメント（薬に似たような商品）に近い商品を開発してみてもどうか。例えばビタミンCを抽出するなど、サプリメントから防腐剤、医薬品を視野に入れることが大事。農業の形だが、小さなマンションで軽く農業が出来るシステムを作り、そして車の中で農業が出来ないか。広く一般からアイデアコンテスト（仮）を募集、または賞金をやや高目に設定してかのや農業王決定戦（仮）を募る。緑化計画は家の中から酸素を多く出せるように工夫する。かのや自宅浴（森林浴）決定戦（仮）イベント会場などに登場されるといい。周知は最初はラジオで募集。今日の仕事募集は最初ラジオで募集して、経験値をつける。また外の作業は折りたたみが可能な屋根をつくる。最初、クラウドファンディングではなく、アイデアコンテストから募集。そしてかのやフェスティバルに軌道が乗りそうだったらクラウドファンディングで公募。かのやブランド品を返礼する。今年が天候が荒れます。日照が強かったり、弱かったりするので。屋根は今後働きやすく日影をつくること。また税務署に相談する。熱中症をできるだけ少なくする。また水のみ場（簡易）がつかれないか。これも公募する。あとトイレも公募する。そして洋服も開発する。通</p>	E	<p>御意見として承り、今後の市政運営の参考とさせていただきます。</p>

	<p>気性の良い軽い服をクラウドファンディングで募集する。学校給食ヘルシーな食事を作れないか。開発を1年に1回。1食 1,000 円位を目安に献立をつくる。もし可能だったら 5,000 円位に挑戦してみることに。かのやの給食を考えてみませんか？ (仮)。100 円、300 円、500 円、750 円、1,000 円、1,500 円、2,000 円、2,500 円、3,000 円と金額を決めかのや給食コンテスト (仮)。かのや給食クラウドファンディング (仮)。加工品だけでなく、かのや惣菜コンテスト (仮)。かのや伝統食クラウドファンディング+アイデアコンテスト+かのやフェスティバル+かのや試食会+かのや通販 (仮)。誰でも作れるような物を持ちて作業効率農業アップコンテストの開催 (仮) などを考えてみることに。また、ヴィーガンのお菓子の開発、ヴィーガン料理などを水稲から米粉、さつまいもから黄色の色、つまり卵の色、スポンジの色、茶から緑などを考える。</p> <p>【意見については原文のまま記載】</p>		
6	<p>「農地の集積・集約・大区画化」から「農地の分散・小区画化」への方針転換</p> <p>これまでの画一的な農業政策「農地の集積・集約・大区画化、大規模農家の優遇、化学肥料前提の画一的大量生産型栽培による収益重視」から、持続可能な農業政策「農地の分散・小区画化、小規模農家及び兼業農家の優遇 (市民の家庭菜園推進)、地産有機肥料等による安全性重視の付加価値型農産物による収益重視」に方向転換していただけないでしょうか。</p>	E	御意見として承り、今後の市政運営の参考とさせていただきます。
7	<p>「農業の多様性を楽しみ全市民が農業に親しむ町、オーガニック農業大国かのや」へ方針転換</p> <p>将来的な食料飢饉・燃料費高騰・自給率の安全保障・人口減少などの諸問題へのリスクヘッジのためには輸入肥料や輸入薬品に頼らない地</p>	E	御意見として承り、今後の市政運営の参考とさせていただきます。

	<p>域生産型の有機農業（オーガニック農業）への方向転換と各体制確立が急務であり、特に、国際競争が激化する中でこれから超人口減少社会を迎える日本にあたっては、「全市民が何らかの兼業農家等として農畜産業に携わることで食料自給率 120%維持を目指すこと」が最終的には不可欠であると考えられ、そのための体制確立を長期的戦略のもとに進める必要があるのではないかと考えます。</p>		
8	<p>現在の「農地の集積・集約・大区画化」の農地政策は、本質的に SDGs の目指すところと馴染まないのではないのでしょうか。本政策は、広範囲を耕作する必要があるために大型農機具類やスマート農業機械類を調達できる資金力のある大規模農家でないと営農継続できないという現実、高額機械類の費用対効果を追及すると「単一作物の大量生産」を目指すことになるが中長期的には「市場競争による価格下落」につながってしまう現実、また、「大型機械類の使用」のみならず「化学肥料や殺虫剤使用が不可欠な農法」でもあることから「消費者の安全性や生態系への影響よりも収益性重視の農業形態」をとらざるを得ない現実を生み出しており、様々な観点から生物多様性・持続可能な社会の発展につながる農業政策であるとは言い難いように思います。</p> <p>具体的な事例としては、上記の政策により、資金繰りの難しい小規模農家や兼業農家・小規模農家の多くが廃業、後継者不在により荒廃農地・遊休農地が増加、高額農機具の借金を返済できない農家の自殺者が増加、参入ハードルが高いため新規就農率が低下、収量を上げるために機械類購入費・化学肥料費・除草剤費・殺虫剤費等の経費負担が継続的に発生、地力低下による病害虫の多発、薬剤が効かない耐性雑草・病害虫の発生によりさらなる化学薬品使用のための経費負担が増加、大量生産ルートに乗れない地域特性のある固有農産物の消失、出荷用作物は農薬使用・自家消費作物は無農薬という暗黙のダブルス</p>	E	<p>御意見として承り、今後の市政運営の参考とさせていただきます。</p>

	<p>タンダードが定着、消費者側の安全性を置き去りにした農業形態の普及、農薬散布等による農家の健康問題、などの諸問題を生み出しているのではないのでしょうか。</p>		
9	<p>将来の農業の担い手の育成 ⇒学校を通して農業に親しむ児童生徒を増やす</p> <p>鹿屋市内にある幼稚園・保育園・小学校・中学校・高校・大学などで、近隣の遊休農作地などを活用し、＜自分たちで作物を育て、収穫し、処理し、調理して食べる＞カリキュラムを毎年実施し、各学年ごとに＜食農とは生きる営みである＞という食農体験を通して、農業を身近に感じる児童生徒を増やす。市として、各学校近隣の遊休農作地のあっせん、協力可能な近隣農家への声掛け等の補助、各家庭単位でも家庭菜園や貸農園などで農体験ができるように支援を行う（もしくは民間委託等）。</p>	A	<p>「第4章 基本施策 4 加工・流通・販路開拓 (3) 食・農との関わりの強化」において、家庭、学校、地域等あらゆる場面での食育の推進、市民ふれあい農園など市民が農業の魅力や価値を体感でき、農業に親しめる機会の提供に取り組むことを記載しました。</p>
10	<p>オーガニックな農業大国に転換 ⇒地域農産物のブランド力を高める</p> <p>農林水産省は、すでにオーガニック農業に舵を切っており、JA や地方自治体の中でも取り組みをはじめているところは増えてきている。特に化学肥料や燃料等の価格高騰を背景に、いかに早く、化学薬品や化石燃料を減らした手法による農畜産物の生産体制・流通体制・販売体制を確立し、全国的に一步先をリードできるかが重要である。地域独自の農作物の固定種の保護、地域独自の有機発酵堆肥生産体制の研究、取組農家の真摯な想いなどの本質追求の姿勢はブランド力（信用力）につながる。鹿屋市内で同取組を行っている農家を集めて情報交換会や勉強会を重ねながら、諸課題の洗い出しや戦略を練り、地域農家や消費者への認知度向上、取組件数の増加、地産有機堆肥の生産体制などの確立、最終的には「鹿屋オーガニック認定マーク」などの分かりやすい形でオーガニック農業の普及定着へむけた施策を図る。</p>	C	<p>「第4章 基本施策 3 農村環境の保全 (1) 環境保全型農業の推進」に係る具体的な施策の御提案として承り、今後計画を推進する上での参考とさせていただきます。</p>

	<p>オーガニック農法に取り組む農家を増やす ⇒価格補償や財政支援 化学肥料などの化学薬品を使用しない農産物は収量が少なく形状がそろわない可能性が高く、特に安全性などの信用度が定着しない初期は市場競争に不利になることが予測されるため、鹿屋市として取組農家の前年収益との差額補償などの財政支援を行い、参入農家を増やす施策を図る。また、地域の取扱い販売店や飲食店などの販路拡大戦略、他地域へのアピールなど広報支援など、普及施策を図る。</p> <p>化学薬品（農薬・除草剤・殺虫剤）低減もしくは不使用の作物栽培の農家を増やす ⇒学校給食に優先的に採用</p> <p>見た目重視の市場競争ではアピールが難しい農作物も、学校給食に優先的に採用する方針が採られれば、農家側としても作付けに挑戦しやすく、徐々にノウハウやスキルを向上することが可能になる。子どもたちの健康に有益であることは言うまでもなく、産直の作物であることを伝えることで児童生徒が農作物に親しみを感じる機会を作ることができる。</p>		
11	<p>自家消費作物を育てる市民を増やす ⇒貸農園事業の推進、農地あっせん、体験講座</p> <p>民間貸農園事業の推進・市営貸農園事業の拡大により気軽に自家消費野菜を育てる市民が増えるように支援、また、兼業農家に興味のある市民が気軽に挑戦し、農業に参入できるように農地あっせんや体験講座などの支援事業を行う。</p>	A	<p>「第4章 基本施策 1 担い手の育成 (2)多様な担い手の確保・育成」において、農業を学べる機会（農業塾・研修会等）の提供に取り組むこと、また、「第4章 基本施策 4 加工・流通・販路開拓 (3)食・農との関わりの強化」において、市民ふれあい農園など市民が農業の魅力や価値を体感でき、農業に親しめる機会の提供に取り組むことを記載しました。</p>